

第3回 イオンSATOYAMA フォーラム

～里山・地域コミュニティがもつレジリエンス～

2026.2.18 (水)

会場：国連大学 3階 ウ・タント国際会議場



■ 目次

■ 開会式 P3~P4

- ・主催者挨拶
- ・来賓挨拶
- ・グラフィックレコーディングについて

■ 第1部 P5~P8

- ・基調講演

東日本大震災から15年 教訓とその伝承

—東北大学 副学長 災害科学国際研究所 教授 今村 文彦

能登半島地震からの地域内外のつながりを活かした再生と復耕の実践報告

—一般社団法人のと復耕ラボ 代表理事 山本 亮

里山整備による減災対策

—長崎県 南島原市みんなの森守協議会 理事 内田 繁治

綾ユネスコエコパークのつながる自然とつなげる地域

—宮崎県 綾町役場ユネスコエコパーク推進室 係長 河野 円樹

変化する里山景観にみる森林と地域住民のレジリエンス—ボルネオ熱帯の事例から—

—大阪公立大学大学院理学研究科 教授 竹内 やよい

■ 第2部 P9~ P17

- ・連携大学の2025年度活動紹介

—国連大学……………能登らしさを大切にした創造的復興

—早稲田大学……………福島県津島地区での活動から見た 里山の現状

—京都大学……………里山から考える、野生動物管理とモニタリングの取り組み

—千葉大学……………広葉樹林の風倒被害と再生

—東京大学……………社会の回復力向上に資する自然に基づく解決策

- ・パネルディスカッション テーマ「里山・地域コミュニティがもつレジリエンスについて」

- ・イオンモール仙台上杉の事例紹介

- ・まとめ

■ 当日の会場の様子 P18~ P20

- ・研究・活動紹介展示
- ・会場内の記録

■ 参加者アンケート結果 P21~ P22

*HPにてアーカイブ動画を配信しています。

開会

主催者挨拶

公益財団法人イオン環境財団
専務理事 兼 事務局長

山本 百合子

イオン環境財団は、1990年の設立以来、ボランティアとともに国内外で1,284万本を超える植樹を実施してきたことを述べ、宮城県石巻市での海外防災林再生や、山形県南陽市での山林火災による焼損地にて植樹を実施した事例など、各地の災害復興の実例を紹介。今後は現代社会にマッチし、次世代も活動しやすい「サステナブルな新たな里山」の構築について言及した。

来賓挨拶

環境省 自然環境局 自然環境計画課
地域ネイチャーポジティブ推進室 室長

奥田 青州

ネイチャーポジティブ推進の一環として環境省が2023年度より開始した「自然共生サイト (OECM)」に触れ現在、里山を含む485箇所 (約10.5万ヘクタール) が認定されていると報告した。また、里山の保全には地域住民の力が不可欠であるとした上でイオン環境財団の活動はネイチャーポジティブ実現に向けた重要なモデルであると高く評価し、今後の取組みに更なる期待を寄せると述べた。

来賓挨拶

国連大学
サステナビリティ高等研究所 所長

山口 しのぶ

この第3回SATOYAMAフォーラムが国際社会において、タイムリーで重要な取り組みであるとし現代社会が直面する深刻な課題として生物多様性の損失、気候変動に伴う複雑な諸問題そして増大する災害のリスクを挙げこれらリスクへのレジリエンスとして里山が持つ役割の重要性をビデオメッセージとして寄せた。



第2回イオンSATOYAMAフォーラムに引き続き、今回もグラフィックレコーディングで記録した。当講演内容やディスカッションを視覚化することで、振り返りを容易にしている。

グラフィックレコーディング担当者

株式会社たがやす 反中ひろの・友澤里子・徳永みきな

第1部 基調講演

東日本大震災から15年 教訓とその伝承

東北大学 副学長
災害科学国際研究所 教授

今村 文彦



東日本大震災の発災から15年が経ち、複合・連鎖的災害の教訓を総括した。海底の泥を巻き込んだ「黒い津波」や、地下水位の影響で防潮林の根が浅いために、流出した事例から、自然の特性を理解した多重防御の重要性を指摘。グリーンインフラは今後も重要な役割を持つ。そして「ビルド・バック・ベター（より良い復興）」を提唱ししなやかさと教訓を併せ持つ「竹」のようなレジリエンスを提示し伝承活動を続けていくことが地域の回復力を支えると説いた。

能登半島地震からの地域内外のつながりを活かした再生と復耕の実践報告

一般社団法人のと復耕ラボ
代表理事

山本 亮



2024年の能登半島地震と奥能登豪雨の被災体験に基づき、里山の生活文化とコミュニティが持つレジリエンスについて報告した。震災直後に祭りの経験を活かした炊き出しや、山水を自力で管理・活用する知恵が緊急時の生活を支えた事実にも言及。平時は森づくりに従事し、有事には支援の担い手となる「山に関わる人材」の育成こそが地域のレジリエンスを強化する鍵であると説いた。

第1部 基調講演

里山整備による減災対策

長崎県

南島原市みんなの森守協議会 理事

内田 繁治



植樹がもたらす防災効果について報告した。2011年からボランティアの皆さんと再生した「イオンの里山」が、2021年の記録的な大雨の際、周辺で地滑りが相次ぐ中で被害を免れた例を挙げ、森が雨水を地下へ貯め込み地面の崩れを防ぐ「天然のダム」として、地域の安全を守る大きな力になることを示した。

綾ユネスコエコパークのつながる自然とつなげる地域

宮崎県

綾町役場ユネスコエコパーク推進室 係長

河野 円樹



日本最大級の照葉樹林を活かした町づくりを紹介した。世界的に貴重な自然がある「綾町ユネスコエコパーク」に触れ地域の資源、研究者の知恵、経済の発展が重なり合うことで、自然と人間が共に歩む「災害に強い地域」が実現できると強調した。

第1部 基調講演

変化する里山景観にみる森林と地域住民のレジリエンスーボルネオ熱帯の事例からー

大阪公立大学
大学院理学研究科教授

竹内 やよい



熱帯ボルネオ島の里山と、現地の人々の関わりを発表した。熱帯里山の共有林は生物多様性が高く、地域社会は多くの恵みを楽しんでいること、一方で共有林は開発により失われつつある現状を報告した。急速に変化する熱帯林の景観の中で、熱帯林と地域住民のレジリエンスに関する知見を得ることの必要性を説いた。

第2部 連携大学の2025年度活動紹介

国連大学 能登らしさを大切にした創造的復興

国連大学 サステナビリティ高等研究所
客員リサーチフェロー IPSI事務局長

渡辺 綱男



里山を「二次的な自然」と定義し、人と自然の共生を目指す「里山イニシアティブ」の国際的な取り組みを紹介。

特に能登半島の震災復興において、世界農業遺産にも認定された里山里海の「繋がりを再生することが、創造的復興の鍵であると強調し次世代を担う若者の視点を取り入れ、地域の文化や伝統を活かした復興プランの策定が不可欠であると述べた。

早稲田大学 福島県津島地区での活動から見た里山の現状

早稲田大学
文化構想学部 4年

柳 百香



原発事故の影響を受ける福島県浪江町津島地区での活動を通じ、里山が直面する厳しい現状を報告した。その上で里山は単なる自然環境ではなく、そこで営まれる「暮らしや文化」も含むものであると定義したが、人口減少や除染の遅れにより維持管理が個人や里山地域の努力を超えた困難な状況にあるとも指摘した。

そうした状況を踏まえ、安易に利活用を語るだけでなく、現場の過酷な現実を目を向け、丁寧に向き合い続ける姿勢の重要性を訴えた。

第2部 連携大学の2025年度活動紹介

京都大学 里山から考える、野生動物管理とモニタリングの取り組み

京都大学 フィールド科学教育研究センター
特定研究員

小井土 凜々子



地域の担い手不足に伴う里山、野生動物管理の難しさと、それに伴う軋轢の深刻化を指摘。

特にツキノワグマは被害の深刻化により指定管理鳥獣に指定されており、科学的データに基づく広域的な管理が急務となっている。

研究の結果、行政区をまたいで分布している個体群のまとまりが明らかになり、県境を越えた自治体間の連携による持続可能な管理体制の構築を提言した。

千葉大学 広葉樹林の風倒被害と再生

千葉大学 大学院
園芸学研究院 教授

高橋 輝昌



2019年の千葉県の台風被害を教訓とした広葉樹の風倒被害と森林再生について発表し、樹冠の大きさと根の深さの比率から倒木リスクを評価する手法を提示し、土壌の性質と樹形による予測の可能性を示した。また、千葉県に多いマテバシイ林を在来の常緑広葉樹林へ再生させる試みを紹介。萌芽を継続的に除去することが在来種への転換に不可欠であると説き、科学的知見に基づいた管理の重要性を指摘した。

第2部 連携大学の2025年度活動紹介

東京大学 社会の回復力向上に資する自然に基づく解決策

東京大学 大学院 新領域創成科学研究科
サステイナブル社会デザインセンター 特任准教授

ヤゼムブスキ マルチン



自然の力を社会課題解決に生かす
“Nature-based Solutions (NbS)”を提唱。
各地の事例から、里山など自然管理が高齢者の生きがいに寄与する一方、高齢者の参加のみに依存した管理では文化的景観の維持が課題だと指摘し解決には「行政と地域の協力」「世代を超えた参加」「未来を見据えた対話」の3点が不可欠だと説いた。

連携大学活動紹介のグラフィックレコーディング



第2部 パネルディスカッション

テーマ～里山・地域コミュニティがもつレジリエンス～



パネルディスカッションでは、能登半島の震災経験や各地の事例、学術的知見を通じて、持続可能な里山の維持管理と未知のリスクへの備えに関して重要な考えが提示された。里山を単なる保全対象ではなく、社会全体のレジリエンスを高めるための「能動的な資源」として定義することを示した次のキーワードが挙げられた。各分野の知見を融合し、地域のアイデンティティを再構築していくことが、今後の里山づくりの重要な指針となることが改めて明らかとなった。

■ 技術と基盤 (道づくり) :

里山を持続させるには管理コストを下げ、災害リスクを低減する「自伐型の道」が基盤となる。重機やチェーンソーの技術習得といった学びの場を提供し、「楽しい」「やりたい」と思えるワクワクする未来を描く人材を育てることが、活動を継続させる熱量となる。

■ 自律分散とネットワーク:

能登の震災では、里山的生活スタイル(井戸水や薪、保存食の活用)が有事の際に大きな力を発揮した。地域内外が繋がる拠点を構築し、生態系の力を防災・減災に生かす「Eco-DRR(生態系を活用した防災・減災)」の視点を取り入れることが、地域の自立した回復力に繋がる。

■ 社会の共通価値:

里山の維持は一地域だけの問題ではなく、平和と同じく「失われそうになって初めて気づく価値」である。里山の課題を人口減少や社会構造の変化という社会全体の問題として捉え直し、特定の担い手に押し付けるのではなく、社会全体で向き合い直す意識が必要である。

■ 地域力の可視化と共生:

野生動物との軋轢といった課題に対し、科学的なモニタリングを通じて状況を把握し、地域へ情報を還元する体制が重要である。画一的な対策ではなく、その土地固有の文化や価値観といった「地域社会の力」を正しく理解し、地域が主体的に活動できる範囲を見極める必要がある。

■ 科学的根拠と物質循環:

森林の管理や災害対策には、根の深さや樹冠の大きさといった科学的データの蓄積が不可欠である。森林再生においては、生産者と消費者が栄養をやり取りする「物質循環」という生態系の最低限の構成要素を保つことが、持続可能な回復を可能にする。

■ 国際展開と未来予測 (NbS) :

自然を活用した解決策(NbS)は、日本の震災復興の経験をウクライナの都市再生など世界へ発信する可能性を持っている。不確実な未来に対し、複数の可能性を想定して備える「シナリオプランニング」を取り入れ、自然を通じて人と地域を再び繋ぎ直すことが求められている。

第2部 パネルディスカッション

パネルディスカッション～里山・地域コミュニティがもつレジリエンス～



モデレーター
東北大学 災害科学国際研究所 准教授 **佐藤 翔輔**

モデレーターとして、「保全と活動の両立」や「未知のハザードへの対応」という二つの議論の柱を提示。パネリストの提言を、自伐型の「道」、地域内外の「つながり」、社会構造としての「平和」といったキーワードで総括した。

パネリスト **山本 亮**

里山の持続には管理コストの低減が不可欠だとし、その鍵を握る「自伐型の道づくり」を論じた。道の上に樹冠の傘を作ることで、草刈りの手間や浸食を抑える技術を提唱。さらに宿泊事業や薪の活用、企業研修を組み合わせ、稼働率に左右されない多角的な経営モデルの構築を提案した。里山管理を経済的に自立させ、災害リスクも低減させる実践的なレジリエンスのあり方を提示した。

パネリスト **渡辺 綱男**

能登の震災経験から、地域内外の「つながり」が復興の大きな力になると指摘。断水時に井戸や薪が役立った事例から里山の生活様式自体が持つ災害時の強みを再評価した。また、復興工事においても森・川・海の連続性を損なわない「Eco-DRR（生態系を活用した防災・減災）」の視点を導入すべきだと提言。地域資源の保全が住民の暮らしの再生と次なる災害への備えを両立させると説いた。

パネリスト **柳 百香**

「平和学」の視点から、里山の価値は危機に瀕して初めて可視化されるものだと論じた。また、間接的・直接的に人はみな里山と関わり合っていることから、里山の維持困難は地域個別の問題ではなく人口減少などの社会全体の「構造的課題」であると分析。管理を特定地域だけに押し付けず社会全体で向き合い、ミクロな地域課題をマクロな社会問題として捉え直すことが重要と述べた。

パネリスト **小井土 凜々子**

野生動物管理現場の「担い手不足」と負担の重さを深刻な課題として挙げ、狩猟者の減少・高齢化が進む中、科学的な理想を押し付けるだけではなく、その地域が実際に「実行可能か」という社会的な力の把握が重要だと強調。地域主体となって持続的に活動できる体制について考え続け行動していくことが、今後発生しうる未知の問題への備えになると結論づけた。

パネリスト **高橋 輝昌**

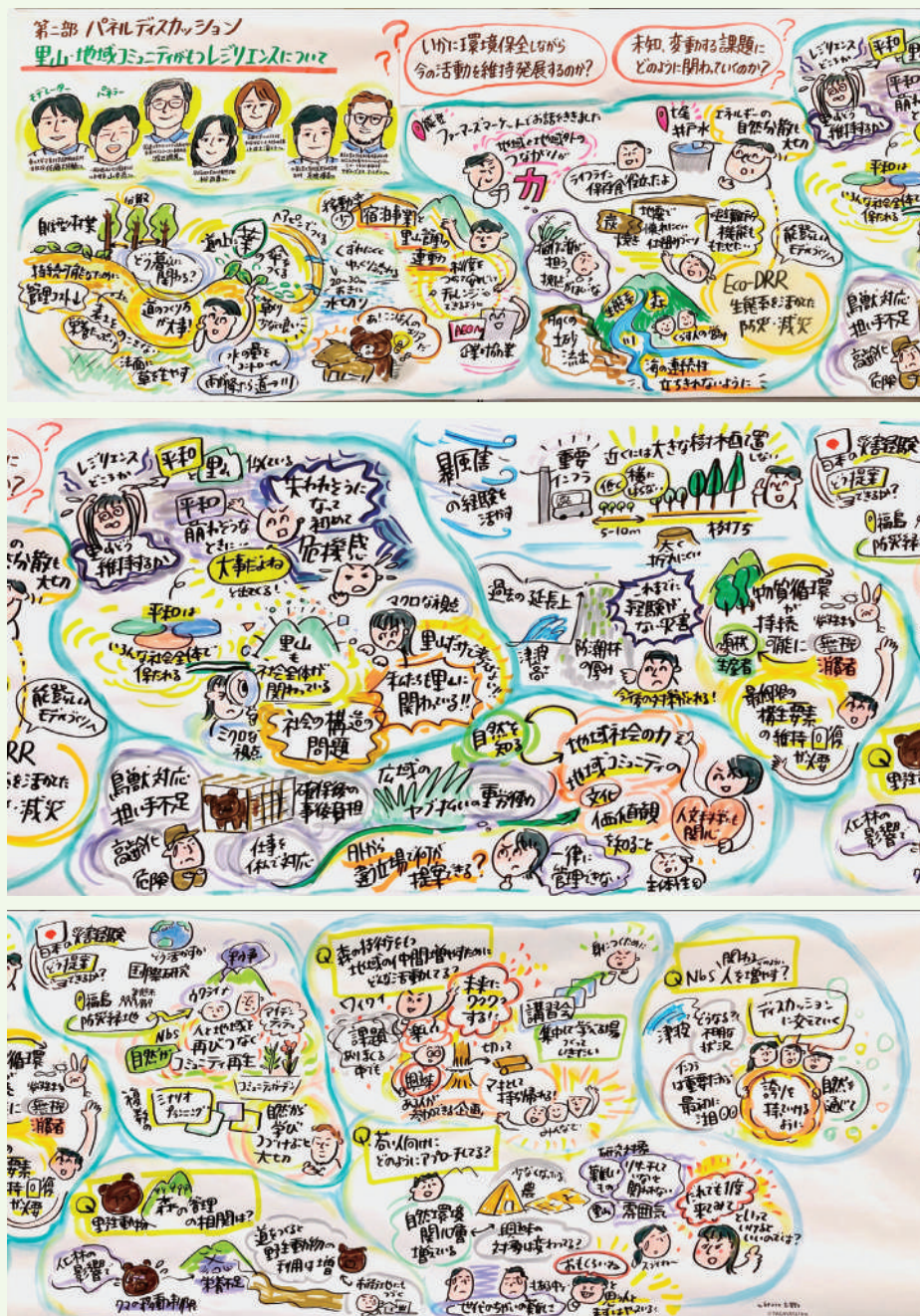
2019年の台風被害を教訓に、インフラを守るための「科学的な森林管理」を提案。道路や電柱の周辺で樹高や枝の広がり抑制し倒木リスクを低減させる具体的な配置モデルを解説。このように森林の質を高めることが、地域社会のレジリエンス向上に直結することを示した。

第2部 パネルディスカッション

パネリスト ヤゼムブスキ マルチン

自然を活用した解決策 (NbS) の国際展開を提唱し、東北の復興知見をウクライナの都市再生に役立てる国際研究を紹介。自然には人と地域を繋ぎ直し、住民の誇りを再構築する力があるとし、不確実な未来に複数の可能性を想定して備える「シナリオプランニング」の重要性も説き、自然を通じたコミュニティ再生の意義を訴えた。

パネルディスカッションのグラフィックレコーディング



第2部 イオンモール仙台上杉の事例紹介

地域の環境課題解決に向けての取り組みーイオンモール仙台上杉ー

イオンモール株式会社戦略統括部
地域サステナビリティ推進部長

渡邊 博史



イオンモール仙台上杉を「イオン生活圏」の核と位置づけ、平時の楽しさと有事の拠点機能を両立させる方針を語った。具体策として、屋上太陽光パネルによる電力自給や地域木材の活用、住民と3,000本を植樹した「ふるさとの森づくり」など脱炭素や生物多様性へのアクションについて述べ、さらに、有事の際活用可能な受水槽やマンホールトイレを備えた防災インフラを整備し、東北大学旧雨宮キャンパスの歴史を継承する場としての役割も強調した。

レジリエント・コミュニティの創生に向けてーイオン防災環境都市創生-共同研究部門の取り組みー

東北大学 副学長
災害科学国際研究所 教授

今村 文彦

2023年から続く産学連携の3つの柱「防災・減災」「グリーンインフラ」「感染症対策」の成果を学術的視点から報告。旧農学部キャンパスの歴史を継承すべく、伊達政宗公の時代から続く「四ツ谷用水」の遺構を可視化し、植物園の専門家の知見を得て土地固有の種を再生する「郷土の森」づくりに取り組んだと述べ、特に、地元の児童がどんぐりから苗木を育てる「苗守プロジェクト」を通じ、住民参加型で100年先の緑を育む意義を強調。また、帰宅困難者対策を含む都市型BCP（事業継続計画）を継続的にアップデートし、このモデルを「仙台防災枠組2015-2030」の成功事例として、2027年の国際会議などを通じ世界へ発信する意欲を示した。

イオンモール仙台上杉の
グラフィック
レコーディング



総括：企業の実践と大学の知見が融合した新しい街のあり方

渡邊氏と今村先生の両氏による報告から、商業施設を単なる店舗ではなく、地域の歴史・自然を再生し、非常時の際に命を守る「レジリエンスの拠点」として再定義する指針が提示された。企業が持つインフラ構築力と、大学の科学的知見や歴史的洞察が融合することで、平時のウェルビーイングと非常時の安全性を高い次元で両立できることが示され、この産学連携による「仙台モデル」は、地域住民を巻き込んだ持続可能な都市づくりの先駆的事例であり、国内外の都市課題を解決する大きな可能性を秘めていると結論づけられた。

～フォーラムの振り返り～

フォーラムの振り返り



東北大学

今村 文彦

東北大学

佐藤 翔輔

フォーラムの最後には、今回の幹事校である東北大学の今村先生・佐藤先生による対談形式の総括が行われ、本日の多角的な議論を「自然のレジリエンス」と「社会のレジリエンス」という二つの側面から整理し、今後の指針を提示した。

■ 多面的な価値を持つ「Eco-DRR」と「NbS」

佐藤先生は、本日の議論を通じて「Eco-DRR（生態系を活用した防災・減災）」の重要性を再認識したと述べた。特に、自然を活用した解決策（NbS）は防災だけでなく、ウェルビーイングや生きがいといった多面的な評価軸があることに着目した。こうした多様な価値が組み合わさることで維持管理の持続可能性が高まり、結果として里山からレジリエンスを学ぶことができるとの見解を示した。

■ 科学的知見によるレジリエンスの体系化

今村先生は、自然が持つ回復機能と、個人や社会が持つ回復力を融合させる必要性を説いた。科学的なデータを積み重ねることで、それぞれの地域が持つレジリエンスを体系化・可視化し、リスクを低減していく総合的な取り組みが不可欠であると指摘した。また、里山という言葉で境界線を作るのではなく、全ての人々が「ステークホルダー」として関わる社会構造への転換を促した。

■ 原動力としての「楽しさ」と国際的な発信

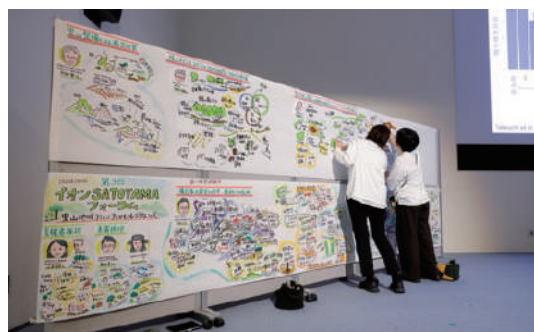
議論の結びに際し、佐藤先生は、しなやかな回復力の根底には「深さ（根っこ）」が必要であり、その熱量となるのは「楽しさ」や「ワクワク」といったポジティブな動機であると強調した。今村先生は、これらの知見や「仙台モデル」の成果を、2027年に開催されるアジア太平洋防災閣僚会議などの国際的な舞台で共有し、日本から世界へ向け「自然と共生するレジリエンス」を発信していく意欲を語り、フォーラムを締めくくった。

会場内の様子

会場内には大学等の研究機関やイオン環境財団と里山活動に取り組む自治体の防災に関連した研究内容が展示されました。各団体の展示詳細は、ホームページでご確認ください



フォーラム開催中の様子

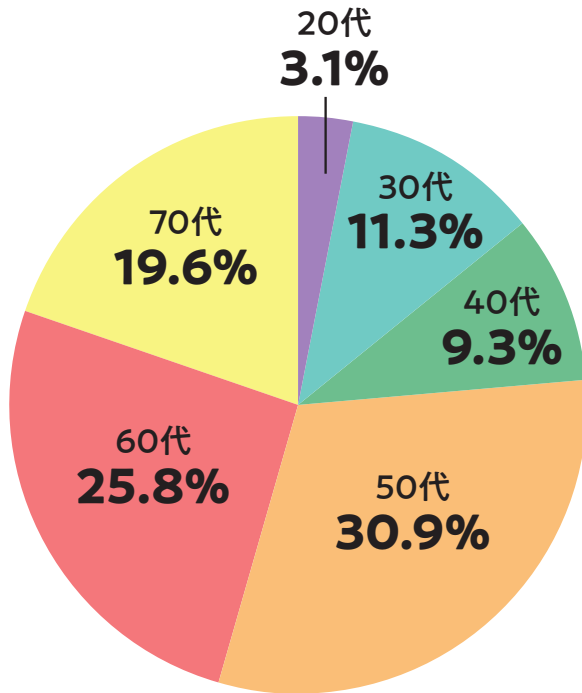


参加者アンケート

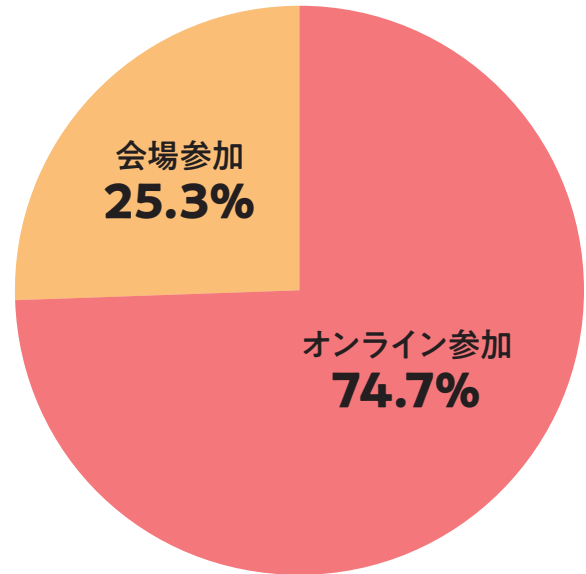
回答者97名

(参加者数450名、アンケート回答者数97名)

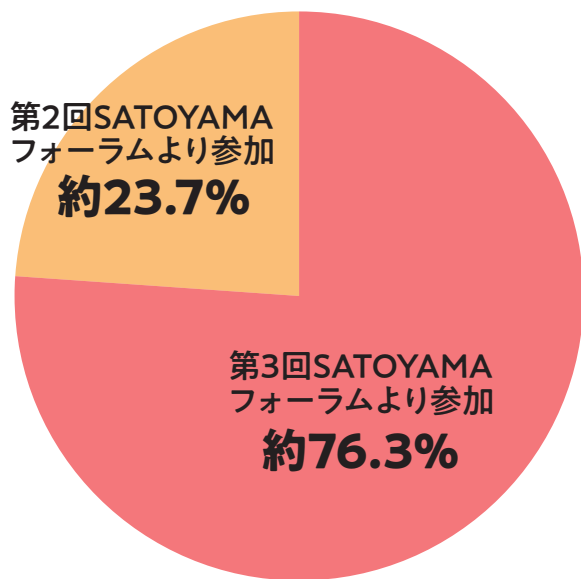
回答者年代



参加形態

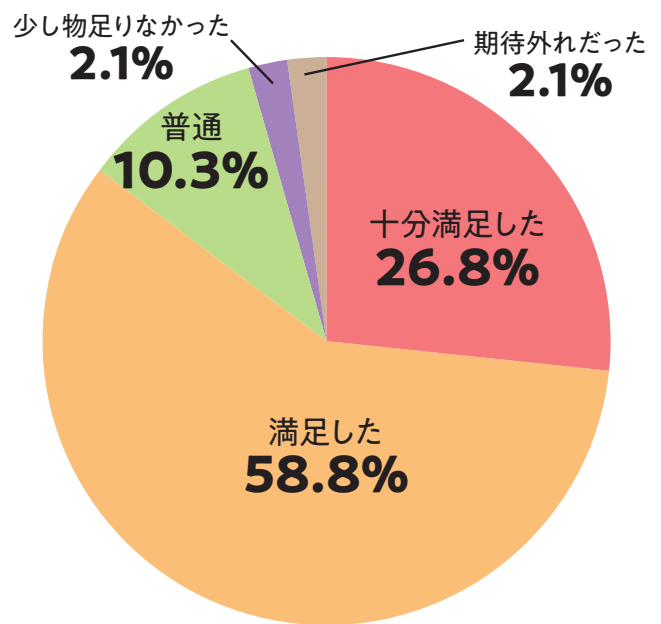


リピーターの割合



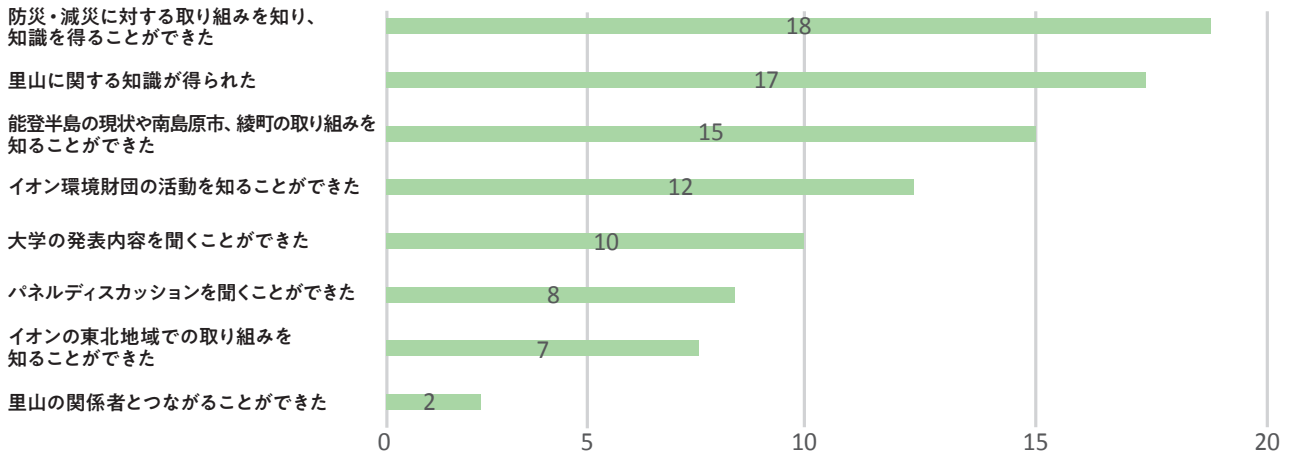
本フォーラムの満足度

85%以上が満足と回答しています。



参加後アンケート 回答者97名

参加理由は達成されましたか(複数回答可)



皆さまからのご意見

イオンSATOYAMAフォーラムでは今後の運営に向けて参加いただいた皆さまよりフォーラム全体に関するアンケート(自由記述)をお願いしました。貴重なご意見を多数いただきましたので、一部ではありますがご紹介させていただきます。

満足度	年代	お住まい	ご意見
十分満足	60代	千葉県	未来を見据えた地域の活性化や復興の取り組みをこれからも応援していきたい。
満足	60代	栃木県	回数を重ねるたびに内容が濃くなっていると感じる。今回はモデレーターの知見が素晴らしく、専門家による進行の質の高さを実感した。
満足	60代	東京都	都会育ちで里山の基本を知らなかったが、地域住民と自然の相互作用の重要性を学んだ。地域に寄り添った活動を継続してほしい。
満足	50代	宮城県	こうした機会はとても大切だと思います。ぜひ継続しての取り組みを期待しています。
満足	50代	千葉県	継続的な開催に感謝している。里山の問題は複合的であることを改めて理解した。次回は問題提起だけでなく、素晴らしい成功事例の話もより多く聞きたい。
満足	50代	福岡県	里山維持には若手不足が共通の課題だと感じた。会場の外には若者が溢れているので、次世代が気軽に参加し、自分事化できるような発信の工夫を期待したい。
満足	50代	福岡県	非常に充実した内容だったが、里山維持の課題である『若手不足』をもどかしく感じた。会場が若者の集まる渋谷であるだけに次回は若手が気軽に参加できるような発信を期待します。
十分満足	40代	石川県	今回もグラフィックレコーディングが素晴らしかった。複雑なテーマが視覚化されることで理解を助けてくれる。
普通	30代	神奈川県	グラフィックレコーディングが大変有用で興味深かったのですが、会場の後方からは詳細が見えにくく惜しかったです。大型モニターへの投影や、オンライン(Zoom)でのワイプ表示などを検討してほしい。



イオン環境財団は、これからも里山の保全・利活用を通じて
笑顔あふれる「新しいSATOYAMA（里山）」の構築を目指します
次回のフォーラムでまたお会いできることを楽しみにしております

次回開催予定
2027年2月11日（木・祝）